地球防衛軍4.1 ―戦士達の記録―

イズナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は、英雄の物語ではない。

この物語は、名もなき戦士達の物語である。

目次

Mission：00—1　絶滅抵抗戦争——1

Ｍｉｓｓｉｏｎ：００―１　絶滅抵抗戦争

日本時間２０１７年４月２１日１１時５６分。その瞬間、地球全土の平和は失われた。

２０１３年より存在が確認されていた地球外生命体が地球に降下、３００機を超える大船団が世界各所に飛来した。世界各国はすぐさま地球外生命体「フォーリナー」との交渉の準備を進めると共に、万が一に備え、２０１３年に結成された超法規軍「ＥＤＦ」（※１）は各所に展開する。

その直後、東京に展開していたＥＤＦ部隊が市民を襲っている蟻型の巨大生物と接触。それをきっかけに各所から巨大生物が現れ、ＥＤＦ部隊は巨大生物との戦闘が開始された。

数日後、ＥＤＦの部隊がフォーリナーの大船団にいた内の一隻、輸送船　キャリアーから巨大生物が投下されている光景を目撃。それが決定的となり、北米のＥＤＦ総司令部はフォーリナーを侵略者と認定。空軍による敵船団への総攻撃を行なった。

しかし、結果は「完敗」。船団旗艦「マザーシップ」に損害を与えるどころか、フォーリナーの航空戦力「ガンシップ」の大群に空軍は大打撃を受け、船団にさえ近付く事も

出来ずに壊滅した。そしてこの大敗北は、フォーリナーに制空権を明け渡す事も同意義であった。

空軍が壊滅したＥＤＦと各国軍は陸軍と海軍のみで戦闘を続行し、総力戦体制に移行。フォーリナーも次から次へと新兵器や新種の巨大生物を投下する。

その後1年に掛けて、壮絶な抵抗戦が世界各所で展開される。しかし暴力的な数の巨大生物と隔絶的な技術差のフォーリナーに、人類は加速度的に消耗、出血。末期には各地の各国軍及びＥＤＦは壊滅。組織的な抵抗戦を続行出来ていたのは日本のＥＤＦ東京支部のみだった。

最後の抵抗を続ける東京支部にトドメを刺さんと、フォーリナーは大軍を東京支部へ投入。しかし、東京支部は決死の抵抗戦によりこれを撃破。しかし、フォーリナーは各地に散っていた戦力を東京支部に転進。膨大な戦力を集結させていた。

２度目の大軍を撃破した3日後、東京支部の直上に敵船団の旗艦「マザーシップ」が飛来。東京支部直上にて、最終決戦が行われた。

だが戦士達の誰もが「敗北」を確信していた。

人類に残された残存戦力は全て疲れ果てているのに対し、フォーリナーは強大。戦力差も決定的であり、何もかもがフォーリナーに遅れを取っていた。

誰もが人類の敗北だと確信していた。最早それは否定出来る事ではなく、最終決戦と

は名ばかりの最終抵抗戦だと誰もが思っていた。

しかし、そうはならなかった。

マザーシップからの苛烈な攻撃の中。一人のＥＤＦ隊員（※２）の砲火がトドメになり、マザーシップは撃墜。同時にマザーシップの大船団は地球から撤退。人類は、奇跡の勝利を掴んだのだ。

その後数ヶ月を掛けて、ＥＤＦ東京支部は世界各地に展開を開始。生き残っていたＥＤＦと共同して残された巨大生物を駆逐。アリゾナで最後の１匹を撃破し、巨大生物殲滅を宣言。フォーリナーは、地球上から居なくなった。

そして、復興が始まる。フォーリナーの撃退の代償は余りにも大きく、東京支部以外の文明は壊滅的となっていた。人類も半数以上の４９億人が死亡し、復興しようにも人手さえ不足していた。だが皮肉にも、フォーリナーがもたらした技術が復興の助けとなる。その英知を研究、吸収しつつ人類はたった８年でかつての繁栄を取り戻しつつあった。

各国政府は機能を回復させつつあるが、現在もＥＤＦの庇護下にある。政府というよりは自治政府に近い状態であり、軍隊は持っていない。侵攻前なら兎も角、現在では軍

隊があっても他国に喧嘩を売るなんて言う暴挙を行う思想は誰一人持っていないので、あっても無くてもほぼ同じ事だが。

ＥＤＦも、人数こそ縮小したがそれまで以上の力を手に入れ、完全に復活。新たな戦力を手に、フォーリナーの再侵攻に備えている。

以上が、「絶滅抵抗戦争」と呼ばれるフォーリナーとの戦争から８年経った歴史である。